

過ぎる程あるが、之は佛教考古學の一共通點であり、バルハットや佛陀伽耶の全裝飾の根柢をなしてゐるといつて誇張の言ではない。(本書挿圖第三、并に丙附圖、第十五、及び第十九、第四十九圖)彫刻について出来るだけ溯つて見ても、已に頗る様式化せられ、實際以上にも花瓣を附してある。勿論、古彫刻家が、新しい試みで思ひついた變形を一々詳しく究める事は出来ないが、之を知る爲に殊に興味のある例を見る。之では、丸形の蓮を内に取圍んで、同心圓形の一個或は二個の飾りがあり、蓮葉やその蕾で之が出来てゐる。次には、この飾りは、印度で普通に見る圓形の瓶から優雅なうねりをなして出てゐる。又最も大膽であるが全く當然な試みとしては、中央の花をやめて瓶から出てゐる蓮の花束で圓形の彫刻面を埋めてゐる。而して降誕を現はす中に於ては、彫刻家が母を示すまでに大膽になつて居り、又摩耶夫人が蓮上に立つてゐるものや座してゐるものもあり、新しい内容も加つて、傳説の二龍王は、二象で現はしてあるが、之は梵語で龍象二義が同時にあるからである。この二象は鼻に水瓶を支へて、夫人の丁度頭上に傾けてゐるが、實際はこゝに現はし